

シェイクスピア能の演劇観
 —— 飯塚友一郎演劇学構想体系の視座から ——
Further Steps for a Research of Ueda's Noh Plays

川田 基生
KAWATA Motoo

Abstract: From the standpoint of Iizuka Tomoichiro's theatrical theory, Ueda's Noh plays encapsulate the real nature of poetical drama. Ueda's plays in verse deal with evolution and celebrations of life, and contain attributes that allow them to be internationally understood. Iizuka is an evolutionist in terms of his theatrical theory. The theory of evolution depicted on stage can help understand why Ueda's Noh plays have found supporters abroad. A study of Ueda's Shakespearean Noh plays from the standpoint of Iizuka's theory reveals several important similarities. It is my hypothesis that Iizuka's theatrical theory is further steps for a research of Ueda's Noh plays.

Keywords: Iizuka Tomoichiro's theatrical theory, Ueda's Noh plays, celebrations of life, theory of evolution

上田（宗片）邦義 飯塚友一郎『演劇学序説』 寿ぎ 演劇進化論

私が飯塚友一郎の『演劇学序説』に出会ったのは一昨年の初冬のことであったように思う。妻が鶴舞の名古屋大学附属病院に入院したころだった。JR中央線鶴舞駅^{つるまい}前には古本屋が数軒あり、その書架に白い表紙の演劇学の本が並んでいた。どこかに・・・見覚えがある。上田研究室、所沢の大学院の一室の早春の陽ざしの中にその本があったような気がした。

上田シェイクスピア能への演劇学からのアプローチは入口が見つからないまま十年近くが経過している。大学院での演劇学の恩師、前田允教授は天才肌の方であったが「十年かかるぞ」と、澁谷の喫茶店で語って下さった。そのあと、深夜の澁谷の広い道を恩師は赤信号めざして疾走された。私も、意志的には生涯で一度だけ、赤信号の道を渡った。あれから八年。

飯塚によれば、演劇構造の核心は、遊び、戯れ、^{ことほ}寿ぎにあるという。上田シェイク

スピア能は遊びであり、たわむれであり、寿ぎである。能舞台上での上田邦義師は遊んでいる。通常の能楽師は遊んでいない。上田の舞台は室町の能のように SPIRITUAL である。上田師は寿ぎ師である、という私の説、高弟の菊地善太学兄は肯定して下さるか？

飯塚はシェイクスピアの演劇観は、思考の産物と言うより、劇場生活の経験から生まれているという。上田のシェイクスピアへの第一歩は、大学時代の舞台上にしろされている。学友の岡本靖正氏の言によれば、言葉の^{English}美しいハムレットであったという。写真に残る雰囲気からは 20 世紀の名優ギールグッドの面影がある。わが国の俳優では芥川比呂志を若くしたような。

『ハムレット』2 幕 2 場に“*We'll hear a play to-morrow*” というハムレットの台詞がある。シェイクスピア劇は「見る」ものではなく「聴く」もの。安西徹雄によれば「20 世紀最高のハムレット役者はジョン・ギールグッドである」という。「ギールグッドはオーケストラの如く無限の変化を繰り返すように語った」としている。日本において言葉の響きが美しかった俳優に芥川比呂志がいる。福田訳での彼の台詞には原詩の韻律の響き¹があったという。

飯塚友一郎『演劇学序説』には「演劇進化論」という節がある。「演劇はすべて固定せずに変遷する。そして単純なものから複雑なものに分化する。これが演劇の進化論的把握であり他の諸芸術に比べて、それが著しい特色である」。

飯塚の「進化」の把握は新しい環境への適応としていいだろうか。飯塚は劇には発生と進化があるという。上田の英語能はハーバード大学のキャンパスで生まれ、進化し続けている。それを能楽の国際化という環境に適応しつつある能楽の新たな“種” species、と考えるなら、私も演劇進化論の飯塚学派なのだろうか。

今月²、渋谷セルリアンタワー能楽堂で上田シェイクスピア能を拝聴した。ロビーでの荒井良雄先生の私への言葉は「今年の『能・リア王』は去年の『能・リア王』よりも進化した」であった。荒井先生も演劇進化論の飯塚学派なのだろうか。

¹ 芥川比呂志「坪内逍遙訳で読みなれた「ハムレット」のイメージは、はじめて上演台本（福田恆存訳）を読んだとき、たちまち粉碎された。台詞は簡潔で力強く、律動的で、歯切れがよかった。」昭和 30 年 荒井良雄『シェイクスピア劇上演論』新樹社 306 頁～ この本は名著。オールド・ヴィック座の舞台装置がどうであったか、「十二夜」でフェステが持つパイプはフラジェット、坪内逍遙がシェイクスピアにうちこんだ理由、ヨーロッパの俳優の「訓練された声」、ブランク・ヴァースの解説だけで 5 頁など、シェイクスピア劇を聴こうとする者の座右の書である。

² 2008 年 5 月 10 日『能・リア王』NOH : KING LEAR in Japanese